

いんば沼

《第36号》



(提供：吉岡 一美氏、四街道市在住、「写友いには会」会員)

***** Contents

- いんば沼に生息するカミツキガメ 高山 順子
- いんば沼の希少な野鳥たちを守る 浅野 俊雄
- 賑わういんば沼の魚たち - 夢か、否か - 本橋敬之助

***** Contents

公益財団法人 印 旛 沼 環 境 基 金

<http://www.i-kouiki.com/imbanuma/>

いんば沼に生息する カミツキガメ

高山 順子

千葉県環境生活部自然保護課生物多様性センター主査
(併任) 千葉県立中央博物館上席研究員

はじめに

カミツキガメは、わが国では1960年代にペットとして盛んに輸入されるようになったが、一方、飼育ができなくなり、遺棄されたと考えられる個体が野外で相次いで発見されるようになった¹⁾。千葉県内では、1978年にいんば沼水系の高崎川流域で初めて野外個体が発見され、その後、2002年頃には当地域での繁殖が確認された。

環境省は、2005年に「外来生物法」を制定すると同時に、本種を特定外来生物に指定した。特定外来生物とは、外来生物の中で、特に生態系などに大きな影響を及ぼす生物を指し、輸入だけでなく、飼育、栽培、運搬、譲渡などが禁止されている。にもかかわらず、いんば沼流域は、国内でも最大規模のカミツキガメ野外繁殖地として注視されている。

本稿では、このような現状に鑑み、いんば沼に生息するカミツキガメとその防除の取組の現状を解説するとともに、今後の展望について述べる。

カミツキガメとは……

カミツキガメ (*Chelydra serpentina*) は、北米から南米北部にかけて生息する淡水性のカメで、甲羅は最大長で50cm、体重は34kgほどに達する²⁾。鋭い爪と強い顎をもち、名のとおり、すばやく首を伸ばして噛み付いてくる。原産地では水深の浅い湖沼や河川を好んで生息するが、海水の混ざるような汽水域にも出現することがある。食性は肉食傾向が強いが、植物も食べる雑食性である。

巷では、「いんば沼にはカミツキガメが生息すると聞かされたが、見たことはない」とよく耳にするが、これは、本種が陸上で日光浴をすることは殆どなく、完全な水棲であることと、活動は昼間に比べ夜間に活発であるため、なかなか遭遇する機会が少ないということに因ると思われる。

カミツキガメによる被害……

いんば沼においてカミツキガメの被害としては、まず在来の生態系への影響が考えられる。これは、要するにわが国の淡水域において本種ほど大型化する捕食者がいないことと、雑食性であるため、水辺の動物や水生植物が捕食され、その結果、本来あるべき生態系のバランスが著しく崩

れてしまうことが考えられる。

次に懸念されることは、人の生命や身体への影響である。カミツキガメの性質は、通常は、とても臆病であり、野外で人と遭遇しても、まずは逃走すると考えられる。しかし、人が不用意に手を出せば、前述の鋭い爪と嘴によって大けがを負わす可能性は多分にある。

一方、カミツキガメによる農林水産業への被害があまり注目されていない。しかし、本種はいんば沼や流入河川のみならず、周辺の水田や用水路にも多数侵入・生息しているため、水田に潜む本種を踏みつけたり、あるいは冬の田起こしで冬眠しているカメを掘りだしたりするなど、営農作業中に身体被害を受ける機会は多いといえる。また、いんば沼で発生する水産被害としては、漁具・漁網の中にカメが入り、漁獲物が食べられたり、漁網が食い破られたりする。

防除の取組……

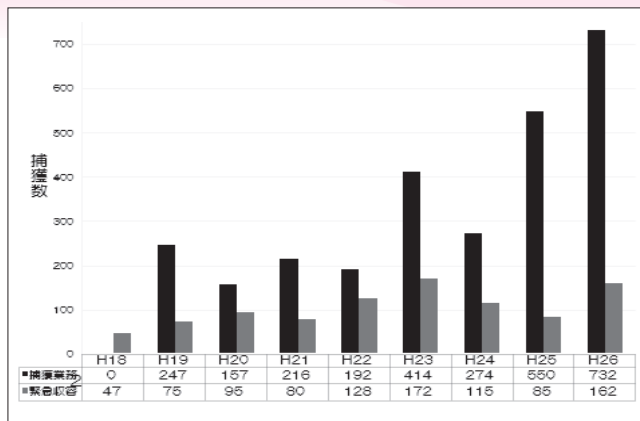
いんば沼水系に定着したカミツキガメを防除するため、これまでにさまざまな取組が行われてきた³⁾。まず、千葉県は防除に先立ち、カミツキガメの生活史や分布などの解明を行った。また、環境省では、本種を特定外来生物に指定した2005年から定着状況の実態を把握するとともに、本種の効果的な防除手法の開発に着手した。

千葉県では、これらの成果を踏まえ、以下に述べるように、主に2つの方法によって本種の防除に取り組んでいる。

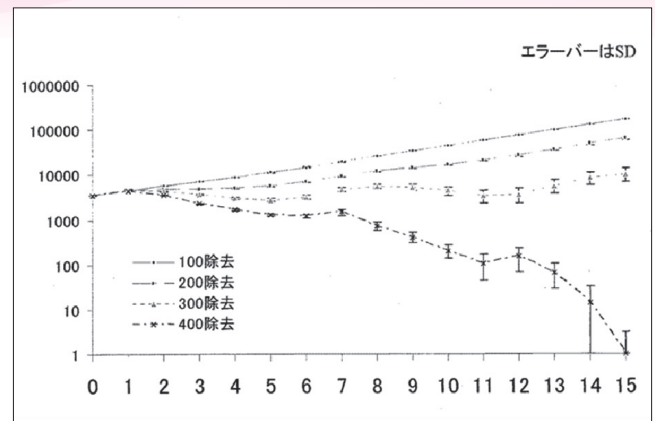
(1) 捕獲事業

カミツキガメの捕獲には、カメ用に改良した“もんどりワナ”を水中にかけ、餌で誘引する方法が最も有効であることが環境省の防除手法開発によって分かってきた。このことから、千葉県は、カメの密度が高い高崎川と南部川の合流地点（佐倉市）を最重点対策区間と位置づけ、もんどりワナによる捕獲を平成19年度より開始した。また、平成23年度には、最重点対策区間の流入河川だけではなく、いんば沼の中にも多数のカミツキガメが生息しているという情報を基にして、西いんば沼でワナによる捕獲を実施したところ、多数のカメを捕獲した。

一方、高崎川と南部川の合流地点である最重点対策区間では、防除を継続したことにより、捕獲される個体のサイ



第1図 カミツキガメ捕獲数の推移



第2図 除去によるカミツキガメの生息個体の予測

ズは防除初期に比べて小型化したが、捕獲数は顕著に減少することはなかった。これは、周辺の水田や用水路からの河川への移入が原因ではないかと考えられることから周辺水路でもワナによるカメの捕獲を平成25年度から開始した。

このように、捕獲事業の開始以来、捕獲エリアの拡大、捕獲方法やワナの工夫などを重ねることによって、カミツキガメの捕獲数は、第1図に示すように、8年間で合計2,782頭に達した⁴⁾。

(2) 緊急収容による捕獲

カミツキガメは、前述したように、水棲であるが、特に5月から6月にかけては水中から地上に上がり徘徊することがある。このため、生息地付近の住民は野外を徘徊しているカミツキガメに度々遭遇することになる。しかし、本種は前述したように、特定外来生物であるため、許可なく移動させることが禁止されていることはもとより、何よりも手で触れることはたいへん危険であるので細心の注意を払う必要がある。このことから、千葉県および市町村では、住民が遭遇した場合には、速やかに最寄りの警察や市町村の担当者に通報してもらうようお願いしている。

現在、千葉県は、このように県民の皆さんから通報されたカミツキガメの情報を取りまとめ、どのような場所で確認されたかなどの解析を進めているが、緊急で捕獲されたカミツキガメは9年間で合計959頭を数えている。

これからの取組……

千葉県は、いんば沼のカミツキガメが将来どのように増減して行くのか、平成16・17年度に専門家に予測計算を依頼した⁵⁾。いんば沼のカミツキガメについて作られたモデルを基に計算すると、最重点対策区間においては、第2図に示すように、毎年100～200匹の成体メス（200～400匹の成体カメ）を捕獲しているだけでは減少せず、毎

年300匹の成体メス（600匹の成体）の捕獲で現状を維持、毎年400匹の成体メス（800匹の成体）を毎年捕獲し続けられれば、15年後にようやく根絶できる、と推定された。一方、これに関連して、捕獲事業と緊急収容の捕獲数を合算して年間で800頭以上を捕獲することができたのは、第2図に示したように、今年度が初めてであり、将来、減少するだろうという捕獲数を技術的に捕獲できる段階にようやく達してきたといえる。

しかし、現在のところ、カメの分布は変化しているなど、当時の計算式をそのまま適用することはできないため、まずは現時点での分布域や生息数を正確に把握し、その上で将来の増減の予測を再度実施するべきであると思われる。

最後に、いんば沼が本来の生態系を取り戻すための課題は、ともあれ環境省の掲げる「外来生物被害予防三原則」を県民一人一人が遵守することに尽きるといえる。

1. 入れない：悪影響を及ぼすかもしれない外来生物をむやみに日本に入れない
2. 捨てない：飼っている外来生物を野外に捨てない
3. 拡げない：野外にすでにいる外来生物は他地域に拡げない

《参考文献》

- 1) 安川雄一郎（2002）：カミツキガメ. 日本生態学会（編）外来種ハンドブック、p.94、地人書店。
- 2) Ernst, C. H., *et al.* (1994) : Turtles of the United States and Canada. Smithsonian Inst. Press.
- 3) 高山順子（2014）：印旛沼水系におけるカミツキガメ防除の取組み. RIVER FRONT. 78、14－17.
- 4) 一般財団法人自然環境研究センター（2015）：平成26年度印旛沼水系カミツキガメ等緊急防除業務報告書。
- 5) 外来亀対策委員会（2006）：平成16・17年度外来亀対策事業カミツキガメ生息調査報告書。

いんば沼の希少な野鳥たちを守る

浅野 俊雄 公益財団法人 日本野鳥の会・会員

》》はじめに……

いんば沼は古くから暴れ沼（洪水の沼）として恐れられていたが、一方では豊かな清澄な水を湛え、周辺の人々の貴重な生活水として利用され、また多くの生きものたちを育んできた。その後、この暴れ沼は先人たちの苦節の努力で干拓・開発され、沼周辺一帯は豊かな穀倉地帯に生まれ変わり、人々に多くの恵みを与えてきた。

そして少し前までは、沼ではヨシ、マコモなどの抽水性植物や、いろいろな多くの沈水および浮葉の水草が生育し、それらの中を魚や水生昆虫などが所狭しとばかりに棲息し、まさに多様性に満ちた生きものたちの一大楽園であった。一方、沼周辺でわき出る豊富な湧水は谷津田を潤すとともに、幼稚魚や小動物の生育や野鳥たちのエサや休息の場として、沼と密接に関わり、一体化していた。

また、自然環境が豊富に残るいんば沼周辺の里山は、今でも生きものたちにとっては極めて重要な食物の宝庫として存在し、多様な食物網が張り巡らされている。しかし、沼と周辺の里山の生物相における“食う食われる”の関係をみると、大型の哺乳動物が少ないため、猛禽類をはじめ多くの鳥類が食物連鎖の頂点に立つ構造となっている。

この稿では、上述したいんば沼およびその周辺域を生活の場としているいろいろな生きものたちの中であって、特に生態系の頂点に立つ鳥類たち、中でも希少な野鳥たちの保護とその棲息環境の保全について私見を交えて話を進める。

》》鳥の渡りの回路……

豊かないんば沼の水と、その周辺の自然に満ちた土地は春と秋、そして野鳥たちの渡りの時季には渡りの中継地として、また越冬および越夏の地として利用される、まさに大きな、広い「渡りの回廊」となる。

このため、ここでは普通に見られる鳥たちのほかに、バードウォッチャーたちが俗に言う「珍鳥（ちんちょう）」、ま

たは通常ではあまりみることのない鳥、日本では過去に数回しか観察されていない鳥、初めて日本で観察された鳥などをみることができる。

このようなことから、いんば沼とその周辺地は、多くの鳥愛好家たちや研究者、専門家にいたるまで大きな注目を浴びる場所になっている。

》》希少の鳥……

珍鳥と称される野鳥は、まさに日本の希少鳥類であり、多くのバードウォッチャーたちや研究者、専門家にとっても見たい、研究したい鳥である。たとえば、沼や周辺地では、近年、コモンシギ、オオヨシゴイ、オガワコマドリ、サバクヒタキなどに加え、個体数が減りつつあるもののコジュリン、コヨシキリ、サンカノゴイなどの希少種の野鳥もいる。

にもかかわらず、希少鳥類のいんば沼における生息環境と自然環境は、成田空港の整備や周辺都市の人口増加に伴う大規模な土地開発によって狭隘化と悪化をきたしている。言うまでもないが、このような人為的な改変は自然の生態系を圧迫し、多種多様な生きものを消滅している。さらには野鳥の個体数の減少、中でも希少種といわれる前述の鳥たちの生息環境の悪化をもたらし、現在、いんば沼周辺では野鳥たちの保護を巡る重要な課題となっている。こうした現状の中であって、近ごろは希少種の野鳥をどうしても見たいとか、是が非でもカメラに収めたいということから環境を変えたり、餌付けをしたりする自己中心な野鳥カメラマンが多く訪れていることも悩ましい問題となっている。

希少種や、本来の渡りのコースを離れて迷い込む野鳥（迷鳥という）および珍しい野鳥たちの中には、渡りの旅で疲れていたり、環境に慣れないために疲弊などして、弱った個体も少なくはない。こうした野鳥たちにとっては、静かな生息環境がとても大事である。幸いにも、いんば沼には魚や水生昆虫、水草など、また水辺にはヨシ、マコモ、ヒ

メガマ、そして堤防にはススキ、オギなどの植物が群生するとともに、昆虫やクモなども沢山いる。一方、また周辺の土地には田畑や雑木林、草原などが細々ながらも自然環境を残しており、多くの野鳥のエサや休息の拠り所となっている。いま、希少種といわれている野鳥の中には、かつてはごく普通の野鳥たちもいたが、その後の生息環境の悪化や減少、変化によって居場所を失い、数を減らさざるを得なかったのである。

確かに、いんば沼では、昭和期の中頃、治水などのための改修工事や、その後の水質悪化によってヨシやマコモなどが減少すると同時に、沼周辺を彩っていた里山の自然は開発工事などで破壊され、野鳥たちの生息環境を奪い続けてきた。

自然の回復には、多くの時間はかかるが、努力をすれば、それなりに回復は望める。しかし、一度、消え去ってしまった野鳥をその場に再び呼び戻すには計り知れない時間と努力を要する。何はともあれ、野鳥の生息環境の一つとしてエサとなる生きものたちを再生させる必要がある。なぜなら、すべての生きものたちは種の保存のために、「食べる」という行為そのものが最も崇高な行為であるから…、である。

》》 保護とその心構え……

希少種の野鳥は、なかなか見る機会がないから、バードウォッチャーや野鳥撮影のカメラマンにとっては是非とも“見たい、撮りたい”の気持ちが先立って、生態系のことや、他人が所有する土地であること、公共の場であることなどを忘れ、大きな集団を成して野鳥たちを追いかけ回す結果となってしまう。特に、近年はカメラの性能も良くなり、また誰もが容易に手に入れられ、簡単に撮影ができることから、マナーに欠けるカメラマンも出て、全体としては野鳥撮影のマナーの低下に繋がっている。

このような現状を踏まえて、公益財団法人日本野鳥の会はカメラ会社と連携し、野鳥撮影に際してのマナーを向上するため、以下に述べるような、“マナー7か条”を提唱している。

第1条 野鳥の巣には近づかない（必要以外には撮影、公開しない）。

第2条 野鳥を追い回さない。

第3条 珍鳥や人気の鳥の情報を公開しない。

第4条 周囲の人や、撮影場所選びには十分な配慮をする。

第5条 餌付けや、環境改変は行わない。

第6条 自然にやさしいマナーを心がけよう（ゴミや吸い

殻を持ち帰ること）。

第7条 ストロボは使用しない。

今後、このような事柄が野鳥撮影に際して十分に遵守されるならば、世間の人々からカメラマンの横暴とか、どこが野鳥愛好家だなどと、いろいろな雑言を浴びせられることがなくなるに違いない。そしてその結果、野鳥写真という新たに写真文化が定着し、次世代に広く野鳥の美しさや可愛さを継承させる大事な役割を果たすものと思われる。

》》 終わりに……

いんば沼は水質の悪化が進み、また周辺域では開発が拡大されているものの、今でも野鳥の生息環境が良好な自然の宝庫であることには間違いない。実際、このことを裏付けるかのように、沼と周辺域で確認された野鳥はこれまでに約250種近くにのぼり、種類数としては日本産鳥類が633種であることを思えば驚きを隠せない。このような状況にあって、いんば沼および周辺域に生息する希少種と言われる野鳥を保護するためには、繰り返しになるが、撮影マナーを十分に守り、また時として、“珍しい野鳥は見に行かない、撮影はしない”という心構えも非常に大切である。このことは、野鳥といんば沼と取り巻く自然をこよなく愛す者と自負、自称するならば、為し得ることである。



カメラマンの集団（下写真＝別角度の部分拡大）



希少鳥類を撮影のため集まったカメラマンの集団

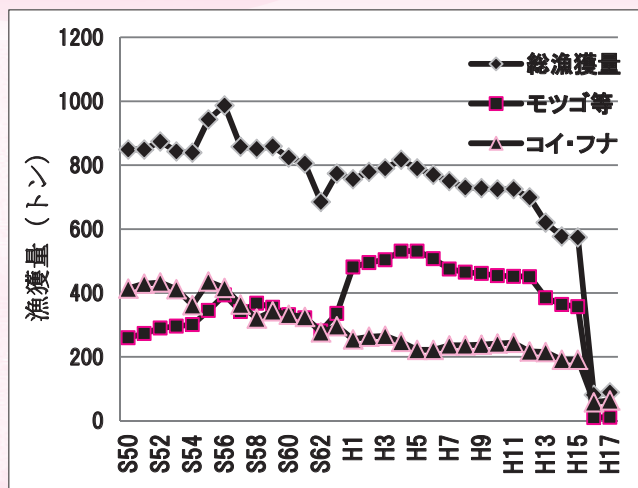
賑わう いんば沼の魚たち — 夢か、否か —

本橋 敬之助 (農学博士)
公益財団法人印旛沼環境基金

10年ほど前、当環境基金が発行した本誌の第24号で新島¹⁾は、「昭和33年頃、淡水魚の宝庫であった琵琶湖に生息する魚類が47種であったことと比較して、昭和50～平成14年の間に確認されたいんば沼の魚類は外来種と、琵琶湖などからの移入種を含めてではあるものの、種類数では約40種が確実で、決して少ないとはいえません」と、論文のあとがきに記している。

これに関連して、千葉県水産総合研究センター内水面水産研究所の直近5カ年(平成20～24年)の張網漁獲物調査において確認された魚類は、移入種・外来種を含め36種²⁾と、種類数でみる限り、昭和50年以降、大きな変化は見られない。しかも、この間に在来種の天敵と恐れられているオオクチバスおよびブルーギル(昭和50年代)や、アメリカナマズ(昭和60年以降)、また最近では、爬虫類のカミツキガメなど、魚・雑食性の外来種が侵入して、今でも多く棲息している²⁾。にもかかわらず、関係者やマスメディアは、外来種が確認されるたびに、決まってその被害により沼の在来種は遅かれ早かれ壊滅的な打撃を受け、消滅は時間の問題であると警鐘を鳴らしてきた。そして、いんば沼を憂える人たちは、外来種の侵入によって在来種や資源量は相当の被害を受けるものと恐々としていた。

第1図は、いんば沼の魚類の資源量を推測するには根拠不足であるが、その巨視的な傾向を推し測るため昭和50年以降における漁獲量の推移を示してある。これをみると、昭和56年の987トンピークに、その後、多少の変化がみられるものの、傾向としては減少を辿り、平成15年の漁獲量はピーク時の半分にも満たない574トンであった。その後は平成17年にかけて急激な減少を示しているが(平成18年以降、漁獲統計は公表されていない)、これは平成15年10月に霞ヶ浦でコイヘルペスの発生が確認されたことと、同年11月にコイ養殖が完全に廃止に追い込まれたことの社会的背景で生じた風評の中で人々の淡水魚の食離れと相まって、漁業そのものが衰退したことが原因である。



第1図 いんば沼の漁獲量(魚類)

いずれにしても、以上の結果から、いんば沼の漁獲量は昭和50年以降、確実に減少しているといえる。そしてこの原因については、関係者が断言するように、外来種の食害影響と考えられないことはない。しかし、別の視点からは、それが必ずしも決定的ではないように思われる。まず、その理由としては、外来種の侵入によって最も被害を受けるのは魚体の小さなモツゴ(今なお、いんば沼では取引されている価値の高い魚種)などの雑魚と危惧されていたにもかかわらず、そのようなことは、第1図の種別漁獲量を見る限り否定される。

確かに、かつてのいんば沼や、その周辺の水路には、今では考えられないほど魚たちが所狭しとばかりに群れていたとか、またある時期には外来種が在来種を駆逐し、沼を独占していたかのような隔世の情景を伝える手記をみることができる。その2、3を挙げてみると…。

吉植は著書のなかで³⁾、「五貫津埜地の低地に行ってみると、そこ的小水路は鮎の行進で埋まっている。鮎、鮎、鮎、ただ鮎ばかりだ。鮎の上に鮎、その上に水が盛り上がり、水が騒いでいる。すぐに下流をせき止めて、鮎の手づかみを開始する。2、3時間で三石あまりも捉えし…」と記している。佐倉市臼井田に在住し、かつて漁師を生業にしていた石井幸一さんは⁴⁾、「昭和19～30年は漁業最盛期で、終戦後の食糧難には、沼周辺の人々の生活は助けられた」、また「昭和20年頃の“すだて漁”では、漁獲の7割近くが外来種のライギョ(雷魚)であった」という。石井政さんは⁵⁾、「昭和30年代初め、ヌカエビが無尽蔵と思えるほど捕れ、3日間漁をやると、うまくいけば当時のサラリーマンの一ヶ月分の収入に当たる金額を懐にできたのです」、また宍倉日出夫さんは⁵⁾、「江川(北印旛沼に注ぐ小河川)の岸辺が真っ赤に染まるほどエビガニがいて、これを穫って集落の農家に持って行くと結構な小遣いになった

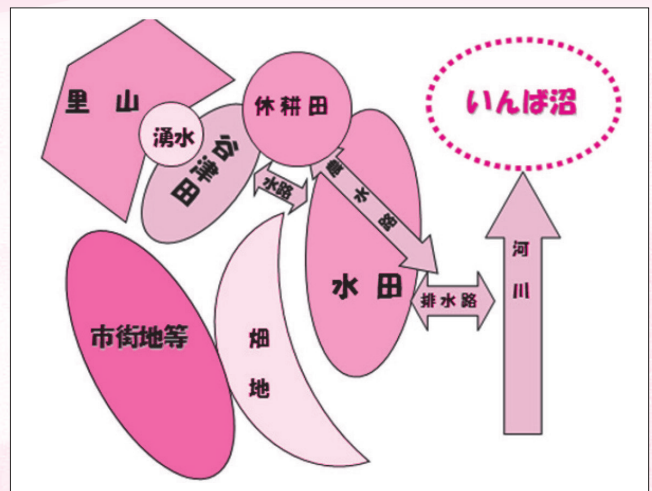
し、江川河口域でズ（漁具の一種）を仕掛けておくと、ウナギ、コイ、フナ、ドジョウ、タナゴ、クチボソ、ライギョ、モクズガニ、ザリガニなど、実にたくさんの種類の魚が捕れた」と記してある。

しかしながら、外来種については、一時期、在来種を脅かして住み処を独占したかもしれないが、全滅に追いやったという話は聞くことがない。このことは、言うなれば、外来種といえども、在来種と長い間、“食う食われる”の関係で競い続けていると、淘汰や棲み分けなどが生じ、自ずと生態学的にバランスがとれ、互いの生活が安定するのではないかと考えられる。その傍証の一つとして、前述したように、ここ数十年間、沼で確認された魚種数は、さほど変化がみられない。確かに、ドジョウ、ナマズ、メダカなどの在来種は、沼から完全に消滅しているが、これは、決して外来種の被害のみに因るものでもなく、また被害が漁獲量の減少をもたらした主な原因とは思えない。

一般に、魚類の持続的な種の生存や資源量は産卵、幼・稚魚の生育と逃避、索餌のそれぞれの場と、それらを取り巻く環境が有機的に繋がって一体化しているかどうかにある。そしてこの一部分たりとも分断されてしまうならば、必然的に種の消滅、さらには資源の枯渇を招くことになる。

第2図は、かつてのいんば沼の魚たちや他の生きものたちの生活廻廊を図式化したものである。要は、いんば沼は流入河川とそれに注ぐ農業用・排水路、水田、そして谷津と一体化し、しかもそれらの空間には落差がなく、ほとんど同じ水位で繋がって、生活の廻廊を成していたといえる。要するに、生きものたちは成長過程の各段階でそれぞれに適した場を選択し、自由に往来ができたといえる。例えば、その中にあって、“田んぼ”はアカガエル・トノサマガエルの産卵、メダカの索餌、ドジョウ、フナ、ナマズ、ヨシノボリ、モツゴ、タナゴ、タモロコなどの産卵および稚魚の生育のそれぞれの場であり、まさにいんば沼の生きものたちの種類と資源を持続させる大事な“揺りかご”として大きな役割を果たし、まさに類ない楽園であったに違いない。しかし、いまでは、この楽園は地獄化を余儀なくされてしまった。恐らく、この原因については終戦直後の食糧難対策の一つとして制定された土地改良法（昭和24年）や、農業基本法（昭和36年）に基づく農業基盤整備事業に根ざすところが大きいのと考えられる。

この事業は、端的には稲作が機械化できるように灌漑用・排水路を分離して乾田化する農圃整備などである。この整備は、いんば沼周辺では昭和30年代に始まり、そして昭和50年代にはほぼ終了を迎え、水田の60～70%は大型機械の導入が可能な乾田に改良されたという。そしてこの乾田化とともに、まもなく導入された大量の農薬散布（除草剤を含む）と多量の化学肥料投与を加えた3点セットは稲



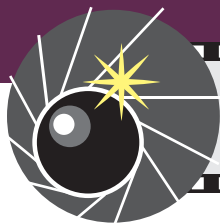
第2図 いんば沼の生きものたちの生活廻廊

作営農の主流となった。このことによって、かつての“田んぼ”は消失のみならず、“田んぼ”と密接に繋がっていた自然の廻廊が分断され、すっかり姿を変えてしまった。言うまでもないが、農薬（除草剤や殺虫剤など）の大量散布は、田んぼを縁とする生きものたちを死に絶えさせてしまった。また、水はけの悪い水田の地中には集水管が埋設され、排水路は素掘りの水路から底の深い三面コンクリートに変えられてしまった。このため、生きものたちの生活廻廊は分断を余儀なくされてしまった。この分断は、いんば沼の漁獲量の推移を云々する場合に見逃せない視点であると同時に、その修復は賑わいのあるいんば沼の生きものたちの復活を約束する確実な術でもある。延いては、いんば沼水圏における生物多様性の安定化への重要な鍵でもある。

最後に、再度、新島の論文のあとがきをなぞると、「沼の水源として谷津の存在は極めて重要ですが、現在、谷津の水路にはサワガニ、スナヤツメ、ホトケドジョウ、シマドジョウ、メダカ、タナゴ類など貴重性の高い生物が沼の汚れから逃れて多く生息しています」とも綴っている。とすると、水がきれいになり、そしてかつてのいんば沼の魚たちの生活廻廊が修復されたならば…！ 夢想か、否か。

《文献》

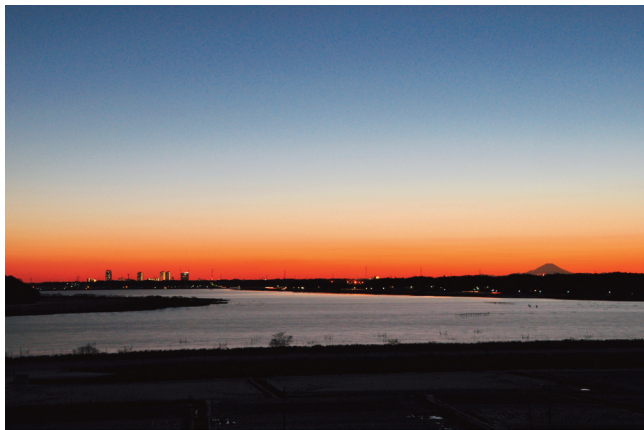
- 1) 新島 偉行：印旛沼と周辺水路の生き物－魚類・甲殻類・貝類－、いんば沼（第24号）、4－5（2004）
- 2) 資料：千葉県水産総合研究センター内水面水産研究所
- 3) 吉植庄亮：馬の散歩、羽田書店、14－15（1939）
- 4) 千葉県：印旛沼再生行動大会・第2部「いんば沼のむかしを語る」、座談会要旨より抜粋
- 5) 水資源開発公団企画・編集：印旛沼ものがたり－あの日あとき－.pp.99（2001）



いんば沼を撮る



写真：内田 儀久（佐倉市鎗木在住）



写真：鈴木 康男（印西市山田在住）

いんば沼の一日を同じサイトから追いかけて遠近を撮ると、いろいろな貌が映し出されるものだなあ～。

日盛り、広くて風光明媚ないんば沼！ 暮れ時、遠くに見る都会と富士山のシルエットに添ういんば沼！ 宵の口、都会のオアシス、いんば沼！

編集雑記

とあるスーパーマーケットのレジで老年の方（国語辞書では60歳を超えた人を指す）が、「よう、もったもったしねい～で、早くしろ！ みんな、待ってんだよ～。腹立つなあ！」、と怒鳴っていた。

私もそのレジの列に並んでいたが、恐らく5分も掛からず、彼の人は精算し終えたはずである。にもかかわらず、どうして、その僅かな時間待つことができないのであろうかと思った途端、最近、老年の方々の理不尽さや素行の悪さが多いことを思い出した。道ばたに痰や唾を平気で吐くわ、他人とぶつかりそうになっても肩を怒らせ道を譲らないわ、店では買う気もないのに商品が無雑作に扱うわ、場所を弁えず空き缶・瓶を放置するわ、各種の施設でルールを守らず駐輪・駐車を勝手にするわ……、等である。そして注意を促すと、理屈は捏ねるわ、逆ギレするわ、喧嘩腰になるわ……、とにかく枚挙にいとまがない。

確かに、今を生きる老年たちは昔と違い、体力が有り余り、何時でも現役として仕事に復帰し、社会に役立つ自信に満ちている。しかし、実状は二進も三進も行かず、結局は、その憤懣やるかたなさを知りつつも他人様や社会に恨み・辛みの形で発露しているのではないかと思えてならない。もし、今の社会が常識の範囲でもう少し老年の就業年齢を自身の体力との相談で緩和させて貰えるならば……、と考える。

このことは、さておき、いまを生きる老年たちは、恐らくは幼い頃から我慢を強いられ、また今では死語化しているかも知れないが、親に、“世間体の悪い事はするんじゃネエ～”とか、“みっともネエ～、真似や格好を、するんじゃネエ～”、とか口酸っぱく言われ、時にはゲンコツを食らいながら育ってきた。そしてその中で、自分の親は言うまでもなく、大人という人間の威厳さと世間での仕草をみてきたはずである。これらのことはすべて良き事の模範で、踏襲すべきとは言わないが、今を生きる老年たちが社会で取るべき態度を今の子供にしっかりと教え、かつ見せておかないと、これからの社会は逆ギレ、ルール違反、気儘勝手が当たりまえの無法社会になってしまうのではないかと……、と憂いている。老年よ！ 狂う、狂うではなく、クール、クールでいこう。

待てよ！ 俺もだあ～。

(K.moto記)

編集：公益財団法人 印 旛 沼 環 境 基 金

発行：平成27年5月31日

〒285-8533 千葉県佐倉市宮小路町12番地

TEL：043-485-0397 FAX：043-486-5116